

三星堆出土青銅器管見(上)

著者	伊藤 道治
雑誌名	研究論集
巻	77
ページ	165-198
発行年	2003-02
URL	http://doi.org/10.18956/00006327

三星堆出土青銅器管見

(上)

伊藤道治

はじめに

1990年8月、河南省安陽市において殷商学会の研究会があり、私も参加していた。今は亡きハーバード大学の張光直教授も出席していたが、彼が一日早く歸国のため出発するというので、ホテルの玄関に見送りに出た。彼はすでにタクシーに乗ろうとしていた。急いで別れの挨拶をすると、半開きのドアから顔を出して、歸途北京に行くかと言う。明后日午後には北京に行くか答えると、必ず故宮へ行けとだけ言って、ドアを閉めて出発して行った。結局故宮で何をしているのか、聞き逃がしたし、研究会に参加している中国の先生方に尋ねてもはっきりした返事はない。

研究会も終り、予定通り北京に行ったが、その日は学会の疲れもあり、ホテルに直行して休んだ。翌日は、午後の便で歸国する予定なので、午前九時前に出て故宮に行った。降車の時タクシーの運転手と11時半に北門を出た所に迎えに来てほしいと約束し、スーツケース2個も彼に託し、兎も角家内と2人で院内に入ることにした。切符の賣場や院内の服務員に特別展は何処でしているのか尋ねても全く知らない。あの広い故宮の中を30分近く小走りですれ廻ったが、それらしい所もないし、特別展の案内など何処にも出ていない。なにしろ出発の時間は11時半と決まっているので、早く捜し当てねばと氣はあせるが、一度休もうというので、日陰を求めて、一般の見学コースの東側の塀を外に出ると、可成りの大木が何本かあって日陰になっている所が少し先にある。其処に行くと、木々の間に余り大きくない平屋が1軒あり、その入口に特別展の表示が出ているではないか。今はその表示に何と書いてあったか忘れたが、此処だ此処だと大声で家内を呼び、入口の窓口で入場券を買い、やれやれこれからと思ったのだが、内部やケースの照明は全くなく薄暗くボンヤリした状態だ。係の人が出て来て、見るのかというから、頷くと、やっと第1室の電氣をつけて呉れた。その第1室で先ず目に入って来たのが、

後に説明する三星堆発見の青銅製 B 型凸目巨大獣面 (K2②:148、四川省文物考古研究所編『三星堆祭祀坑』1999年文物出版社に載せられた資料番号、以下にあげる資料の番号も同じ。この書物が正式報告であるので、以下『報告』と略稱する)であり(挿図1)、同じく大立人像 (K2②:149、150)(挿図23)であった。

私はしばらく茫然として立っていた。巨大獣面の奇怪さもさることながら、大立人像の出現に心を奪われたのである。説明によると、殷代晩期のもので、身長は170㎝余、70㎝余の方形の台座の上に細い身体をまっ直ぐに立て、見下ろしている。これだけの人像を鑄造させた人物は可成りの権力者であった筈である。しかし、私自身のこれまでの研究では、殷周時代にこのような人像——特に個人を顕彰するようなモニュメンタルな——は作られることはなく、そのことは、当時の人びとが人間の個性というものを認めてはいなかったことによると考えていたことと相反することになるのではないか。これは私にとり大きなショックであった〔拙稿「饕餮文の彼方」(『中国古代王朝の形成』所収)、同「殷代の宗教と社会—『饕餮文の彼方』補正」(『史林』第58巻3号)〕。

私と三星堆との出会いはこのようにして始まったが、本格的に研究を始めたのは、2000年秋に四川省への出張が認められ、四川省博物館・三星堆博物館で多数の資料を見学し、成都・北京において前掲の『報告』など多数の研究資料を入手してからである。以下にⅠ 獣面・人面・人頭像・立人像、Ⅱ 鳥の造型、Ⅲ 青銅礼器の三分野について、私なりの結論を述べようと思う。

I-1 獣面

獣面と呼ばれるものは3件あり、A型は2件(K2②:142とK2②:144)、B型は1件(K2②:148)である。A型はともに面の高さ31㎝余、耳を含めた幅は約77㎝あり、これに額に挿入した額飾を加えると、高さは82~84㎝となる(挿図2)。これに対してB型は面高66㎝、幅138㎝あり、現存最大の面具である。これには額飾を装着する額中央の方形の孔は作られているが、額飾そのものは発見されていないし、装着した時にできると思われる痕跡もないので、果して額飾をつけたか否かは不明である。この点については人面C型について述べる際に再びふれる。

眼をあげた時の眼の形は饕餮文の眼と同じであるが、三件の獣面はともに所謂黒目——虹彩——の部分10㎝程も筒状になって凸出している。この眼はもっとも人びとの好奇心を誘うものである。眼筒の中間に幅数㎝の箍状の帯がついている。これは虹彩が凸出する時にひっぱり出た眼球の粘膜かと言われているが、正確にはわからない。なおB型では眼筒が太く、この筒の部分は下脛が下に彎曲している。筒の正面の虹彩に黒色を塗った痕跡はなく、また瞳

孔を示すものもない。この瞳孔の有無については人面などの所でも言及する。A型のうちのK2②:142の眉、瞼には黒色をぬり、口には朱砂をぬる。鼻は鷲鼻、鼻頭は三角形だが、A型の二つはやゝ平ら、B型は高く巨大である。小鼻は渦巻き状になる。人面などではこの渦巻きは見られない。わずかにK2出土のB型人面にその傾向が見られるにすぎない。

口は大きく左右後ろ上方にすどく切れ上がり、上下の唇の間から舌端が口幅一杯に露出する。この点も人面などとはことなる。

獣面の全形は、A型はともに横長の逆梯形で、眉の上の額の所が最も広く、口唇部が最も狭いので、安定をよくするためか、下顎を前方・左右に斜めに張り出させ、下顎の下縁では額の部分に近い幅になる。B型は縦長の長方形に近いが、眉の下縁の部分が広く、口にかけてやゝ細くなる。下顎は前方・左右に斜めに張り出す。

A型・B型ともに顛と下顎骨の末端が上に転折する内側に方孔をあける。A型ではともに5種平方、B型は下の孔は5種平方であるが、顛の所は9×5種平方と大きい。この上下2つの孔に支えのための木柱を通し、何かに固定したと一般に考えられているが、私は数人の人が左右両側から木柱をもってなにかの動作——おそらく武闘的な——をしたのではないかと考えている。身体の部分は布或いは竹材などで表現していたろう。この獣面はいずれも重量が発表されていないが、可成りの重量と考えられるので、激しい動きは不可能であったし、またその必要もなかったと思うが、緩慢な動きは可能であった。

一体この獣面といわれるものは、何を象徴しようとしたものであったのか。この三星堆の文化を創出した人たちの祖先であるとか、天の神であるとか、多くの説が出されているが、私は、この文化を担った人びとがこの土地を占據した時に、征圧したこの土地の人びとが信仰していた神々であり、それは蛇身であると考えられていたのではないかと思う。孫華氏はこの獣面を蛇或いは竜であり、三星堆文化の人びとの祖神か天神を象徴するとしている〔孫華「三星堆器物坑文物叢考」(『四川盆地的青銅時代』 科学出版社 2000年)〕。たゞし同氏は同論文の附録で人首鳥身の神であると説を改めている。この獣面が出土したK2からは青銅製の蛇の残片が幾つか出土している。そのなかに頭部が2個あり、その眼は細長くした鬚鬚文の眼であり、凸出こそしていないが、大きくて瞼を推し上げるように表現され、B型の獣面と共通する。

しかもこの3面の下顎を水平においた場合、顔はやゝ上向きになり、円筒状の眼と水平面との角度は13度から22度余上向きになる。また顛と下顎の上向部の内側にある上下の方孔を垂直線にならべた場合にも、4度から10度の上向きの角度となり、一応眼は上を向くようになっていることを考えると、地を這う蛇性の土地神で、常に上方を伺わねばならないものとして作られたものではないかと思う(頁169参照)。

I-2 人面

青銅製の人面は、第1坑=K1からは、復原不可能なものが1件出土したにすぎない。第2坑=K2からは20件が出土し、6件は復原できないまでに破壊されていたが、14件はほぼ完全な状態であった。『報告』では面の大小と型によってA、B、C、Dの4類型に分けている。A型は右耳と下顎と、右側の頬とが残るに過ぎなかったが、右耳と下顎とは、その大きさから見て同一個体の部分と考えられている。耳は高さ48.2㎝、幅24.5㎝あることから考えて、面の高さは70㎝はあったと見られる。現存最大の銅面はB型獣面であるが、これより大きかったと推定されている。このA型人面は耳などの部分を先に造り、のちに顔面本体と合体させる計画であったが、何かの理由により顔の本体は鑄造に失敗したか、造られなかったのではないかと考えられる。

現存最大の人面はB型のK2②:153のみで、高さは40.3㎝、両耳を含む幅は60㎝あり、B型の獣面よりは小さいが、2つのA型よりは大きく、堂々としたなかにも静逸さをもったものである。眼は大きく開かれ、鼻筋は両眉の中間から真っすぐ通り、鼻頭は平らである。小鼻は獣面の渦巻状に近づくが、これは他の人面や人頭像には見られない。口は大きく顔面の幅一杯に及び、堅く一線に閉じられ、両端は小さく下に折れている。口には朱砂を塗る。下顎は前に張り出しているが、獣面のように斜めに出るのではなく、ほぼ垂直になっている。この口から下顎にかけての造型は、力強さを表現するものである(挿図3)。

下顎の末端が上に曲折する内側と、面の上縁の左右両端には1.5㎝平方の、また眉の末端と顎との間には2×1㎝平方の方孔がある。この孔は、この面を保持・固定するためのものであるが、獣面の同部位の孔より小さく、また次に述べるC型の人面が大体5㎝平方あるのに比しても小さい。これは、この面があまり動きのある場合に使用されたものではないことを示している。この点についてはC型人面の所でもふれる。

C型人面の大きさは、高さ25~28㎝、両耳をふくんだ幅は40~44㎝あり、B型より小さい。この型は数が多く、ほぼ完全なもの12件、そのほか残片中から4件が個体として識別されたと言われているので、少なくとも16件の人面があったことになる。このC型には左右顎の所と、下顎骨の末端が上向する内側に5㎝平方の方孔があり、支柱を通すようになっている。この大きさは獣面A型と同じであり、位置も同じであるのに対して、人面B型よりはるかに大きい。さらに重要なことは、C型にはどれも眉間に5㎝平方の方孔をあけたり、或いは方孔をあけようとした痕跡が残っている。この方孔はA型獣面では額飾を装着した所であった。A型獣面ではその額飾もほぼ完全に残っているが、このC型人面では額飾も残っていないし、方孔そのものも未完のものが多いことを考えると、この人面の方孔は、獣面の額飾に対応するために、遅れて額飾を装着しようとした計画のものであろう。C型人面の額の方孔は、獣面と同じように、

鑄造した面に、鑿で方孔をあけようとしたものと、鑄造の際に最初から方孔をあけたものが1件だけあるが、この1件はC型人面に額飾を装着することが方針として決定された後に鑄造されたものであると考えられる。

またC型人面は、両耳を除いた顔面の幅が高さより1種から5種ほど大きく、全体がやゝひしゃげた感じを与える。この点はB型も同じであり、眼、鼻頭、口なども幅広く作られ、下顎と頬骨の線が接近し、頬骨の線は鋭角にとがったすどい線状を呈し、鼻梁も短い。しかし眼の構造や口の形などは、つぎのD型人面や人頭像と同じである。たゞしC型人面の両眼の視線は前方で結ばれているので、何かを注視するようになっている。この点はD型人面・人頭像との大きな相異点である。顔面全体は、D型や人頭像と異なり、やゝ獣面に近づいているし、また下顎骨もD型や人頭像と同じように垂直に作られたものと、獣面のように前方左右に斜めに張り出したものがある(挿図4)。

以上の幾つかの点から考えると、B型・C型の人面は、獣面を強く意識して造られたものと言うことができる。蛇性の異形神である土地神を囲むようにして、これを圧倒しようとするB型・C型の人面たちは、この土地を占拠支配した人びとの祖先たちの霊を表現したものであろう。そして巨大な異形神と祖霊たちとの間に、祭祀儀礼として武闘的な舞いが行なわれたのではなかろうか。その際、面の大きさと、それを支える木柱を通した方孔の大きさから考えて、獣面とB型人面の動きは緩慢であり、C型人面の動きは早く激しかったと想像される。

最後にD型人面についてふれよう。これは全部で6件しかなく、うち1件は右半のみが残り、他の5件は完全である。すべて小型で、面の高さは15種余、両耳を含む幅は15~20種、顔面のみ幅は大きなもので14種余、最も小さなもので9種である。總体的に顔面は細面であるが、額の部分が大きく、口辺にかけて細くなるもの、額から下顎まで円筒状のものなどがある。5件のうち4件には額に当る所に1.5種平方位の薄い銅板をはり付けたように見えるものがあり、なかには塗った黒彩の残るものがあるので、この部分は鬢髪を示しているものとされている(挿図5)。

いずれも額の後部左右や下顎の末端、或いは額のかわりに下顎前面左右に径1.5種ほどの円孔があり、立てた木柱などに固定する時に用いたものであろう。面そのものが小さいので、これで固定し得たものであろうが、大きな動きは不可能である。また幾つかのものには眉や眼の縁、なかにはK2②:331のように白眼をふくむ眼球全体に黒い色を塗ったものもあった(挿図6)。

このD型の顔の構成は、人頭像とほとんど同じであるが、人頭像では頭頂から下顎の下縁まで20種前後あるものが多いのに比べ、すべて小型であり、しかも固定度も低いことから見て、表だった動きをする役ではなく、異形神と祖霊たちとの争いに関する物語・叙事詩などを背後で詠唱して祖霊たちを称える役をする少年合唱団?ではなかったかと考えられる。

I-3 人頭像

以上に述べて来た獣面・人面はすべて K2 出土のもので、一応同一時期に使用されたものと見てよい。しかし人頭像は K1 と K2 の二つから出土しており、しかも K1 が古く、K2 との間に100年近い隔りがあるとする説もあるので、区別して見る。

K1 からは13件の人頭像が出土し、A・B・C の3型に分けられる。A型は頭頂にソケット状のものがあがり、上から冠或いは頭髪様のものをかぶせたと考えられ、A_b型 (K1:6) はソケットにある4ヶの円孔で固定したと考えられている (挿図7)。A_a型の K1:2 は K2 出土を含めた人頭像中もっとも写実的なものと言われ、頬・顎もゆったりとしたふくらみをもっている。頬骨も柔らかい肉付けで示され、他の人頭像が細く鋭い線で示されるのとは異なる。口は一文字に結ばれるが、力をいれて固く閉じた様子はない。こうした表情から女性の像ではないかとする説もある (挿図8)。鼻梁は太く、両眼の間も広い。眼は大きく開かれるが、虹彩・瞳孔があると考えられる位置は眼の中央より外側にあるため、両側の視線は結ばれず、何を或いは何処を見ているのか判然としない。この眼の状態は、上述の B型・C型の人面を除くすべての人頭像・人面に共通する。A_a型の顔面の高さは23種であるが、A_b型は15.6種と小さい。A_b型の頬骨は線状に表現され、口は短く閉じられ、左右両端は下にさがる。力を入れて閉じたためである。

C型は、頭に左右に張り出しのある冑様のものをかぶる1件 K1:5 のみである。顔面には、額から下顎まで方形の面具をつけるとする説もあるが、明確に面具の縁を示す線はない。武人らしい気負いもなく、むしろ静逸な雰囲気を感じさせる。眼・口・下顎などすべて人頭像の様式にしたがっている。顔面の高さは約23種である (挿図9)。以上3件の A_a型・A_b型・C型はいずれも1件ずつしかなく、その用途などを考える手掛かりもないが、A_b型は可成り小さな像であることが注目される。

残る B型は、頭頂が平で、後頭部に三つ編にした長い髪を垂らしている。B_a・B_b・B_c の3型に分けられるが、B_a型は額に頭髪の生際の線が鑄出されるもので、2件あり、K1:11 は頬骨から下顎まですづまりである (挿図10) のに対し、K1:7 はやゝゆったり造られている。B_b型の K1:72 は、眼から下顎まで下すぼまりの筒状で、特に頬骨から下が長く、眼は大きい割りに無表情である (挿図11)。

最後の B_c型は、『報告』によれば6件あり、うち3件は比較的完全で、3件は破壊され復原不可能であるといわれている。完全に近い3件 K1:3 (挿図12)、K1:8、K1:10 も頸の部分はすべて残破しているが、顔面は大体完全である。3件とも顔面の高さは約20種、やゝ小型で、眼から下はすづまりで瘦せている。『報告』では、これを苦渋の表情としているが、年令的な特徴——老人の如き——をあらわしているのかも知れない。

ところで四川省文物考古研究所の陳徳安氏の著書『三星堆—古蜀王国的聖地』(略稱『陳著』)によると、K1出土として3件の人頭像があげられている。『陳著』図版16・19・21である。一方『報告』にあげられた比較的完全な3件のうち写真が載せられているのはK1:3の1件のみで、『陳著』の3件のいずれとも合致しないし、他の2件を含めた『報告』の3件は顔面高が約20㎝であるのに対して、『陳著』の3件は25~30㎝あり、大型に属するが、その顔面の造型は、眼から下がやゝつまったB_c型である。問題は、『陳著』の3件と『報告』の6件——復原不能の3件を含めた——との関係をどのように考えたらよいかであるが、私には答えはない。私自身は、『陳著』を見た最初には、この図版16(挿図13)・19・21の説明にK1出土とするのは誤りで、K2の出土ではないのかと思ったのである。或いは『報告』の方に何かの手違いがあるのではということも考えておく必要がある。『報告』には、図版写真の誤入、測図の誤り、或いは説明文中の資料番号の誤記などが見受けられるからである。

つぎにK2出土の人頭について見よう。A・B・C 3型に分かれる。A型は頭上にターバン様のものを載せるK2②:83(挿図14)1件のみである。頸の部分をいれた高さが13.6㎝、ターバンの下縁から下顎の下辺までは7.6㎝の小さな像である。顔の割りに眼が大きい、切れ上がってはいない。頬の部分は痩せる。眉間の前額の骨が顕著であるが、この作風は人面・人頭像を通じて唯一の例である。前髪は眉の少し上で切り揃え、耳の上の付け根の前で鬢を揃え、耳のうしろ後頭部は、耳の下の付け根の高さで切り揃えている。耳には飾りをつける孔が3個あいているのも唯一の例である(一般は1個)。この人頭像が示す人物は、この耳飾りの数やターバンから見て、何か特殊な人物と考えられるが、非常に小さな像である点をどのように考えるべきか問題であろう。

B型はさらにa・bの二つに分れる。B_a型というのは、頭頂が平らで、後ろに長く編んだ髪をたらしただけのもので、K1のB型特にB_c型と同じ造型である。このB_a型は『報告』では36件あるとされ、言わばその他大勢といった感がある。大型が多く、頭頂から下顎を含んだ高さが20㎝前後と言われているが、K2②:154の如く、10㎝ほどの小型のものもある(挿図15)。顔面の造型は、眉の上縁から頭頂までが高く、それに比し下顎から口にかけての間が寸づまりになっている。そのために鼻梁も短く、鼻頭が低く平らなものが多い。従って顔の造りが所謂チンクン状を呈するものが多い。しかしK2②:17の如く(挿図16)、顔全体の彫りが浅く、下顎から頬骨の線への皺、眉から上顎の間の凹みも浅く、間延びした感じのものもあるが、少数である。またK2②:118の如く、左右に長い口は顔前面から後ろに幾らか廻り込み、朱砂を塗り、眉・眼の縁、白眼をふくむ眼球にも黒で彩色したものもある(挿図17)。

こうした平頂の人頭像を使用するときには、上に頭髪——後頭部に長く編んだ髪をたらししている、あまり長くはない——か冠様のものを載せていたと考えられている。

先にも述べた如く、K1のB_c型人頭も同じく平頂編髪で、顔の下半部の造型が寸づまりの

ものが多いが、『陳著』図版16・19・21を見た時、これはK2出土の間違いで、K2のB_a型に属するものではないかと私は思ったのである。これは恐らく私の憶測に過ぎないと思う。しかしこのような事を考えたのも、K1B_c型とK2B_a型との間に共通した要素が見られるからであり、若しK1とK2との間に年代の差があったとしても、人頭像の造型に伝統が引きつがれていたことを示すといえよう。しかもB_c型もB_a型もその坑ごとに最も多い数の人頭像であるということは、最も一般的な人間を写したものではなからうか。

次のB_b型はK2②:90の1件のみで、回字文をつけた平頂の冠をいたゞく(挿図18)。後頭の髪は耳の中程の高さで切り揃え、編髪はない。回字文冠は後述の大立人像(K2②:149・150)にも使用され、回字文の冠の上にさらに大きな変形獣型の冠を載せる。この大立人像にも回字文冠が使用されているので、B_b型の人頭像は大立人像のような最高位の人物に近侍するような地位にあったのではないかとされている。

この人頭像の眼は大きく開かれているが、眼尻が上に切れあがった立眼ではないし、鼻梁は短く且つ横に張って頬骨のふくらみに直接つながり、鼻頭も横に拡がった低い形で、下顎のみならず、上顎も幾らか前にせり出ているし、顔の下半はすづまりである。これに対して大立人像は、鼻頭も高く大きな三角形で、顔の下半もゆったりしている。顔面の高さも18種あるのに比べ、この人頭像は12種しかなく、大立人像の嚴肅雄大な風貌には及ばない。

次のC型は、頭蓋の丸い形を残したもので、C_a型とされるものは1件(K2②:58)、冑を付けたのではないかと考えられている。頭髪をどのように始末していたかは不明であるが、後頭部で可成り大きな髪飾りを簪で髪にとめているので、頭頂・鬢から後部の髪を後頭部で髷にしていたのではないとも考えられる(挿図19)。顔には面をつけていたとする説もあるが、面の縁と考えられる線は、むしろ側頭部の髪を剃りあげた時の生え際の線と考えた方がよいと思う。頬は瘦せ、頬骨の褶曲の線も鋭角的に尖った線となり、眼尻はあがり大きく見張る。鼻頭は三角で高く、口は固く閉じ、下顎は強く張る。首も太く、胸も厚く、がっしりした肩であったと考えられる。眉・眼の縁には黒色を塗り、耳孔・鼻孔・閉じた上下の口唇の間には朱砂を塗る。左右の耳の上から後頭部にかけて冑の後部と思われるものが残る。以上のような造型から見て、武人の像と見て誤りはないが、数は1件しかないので権力者か大神官の侍衛であったとすべきであろう。

いま一つのC_b型K2②:63は側頭部の髪を剃り落とし、残った髪を後頭から前頭へ梳き束ね、束ねたものをうしろへねかせたと見られる。髪型から見て冑をつけたとは考えられていない。眼は大きく開かれているが、上瞼の線は水平に近く、強さは感じさせない。左右の頬は破壊されているので、どのような人物を写したものかは不明である。

I - 4 金面人頭像

三星堆出土品のなかに金製品が数多くあったことは、この遺跡の大きな特色であった。K1からは、金製の面1件(K1:282)(挿図20)と木製の杖を巻くようにして貼った金の薄板の装飾(K1:1)(挿図28)が注目を集め、K2からは4件の金面を貼った青銅製の人頭像のほか、玉器の璋や魚の形をした金の極く薄い板状の装飾品や面などが出土した。装飾品には多くに小孔があり、何かに釣り下げたと考えられている。

殷周時代の文化の中心であったとされる黄河中流域では金製品は極く少数しか発見されていない。殷の都であった安陽地域でさえ、小さな金箔片が少数発見されたにすぎない。他の古代文明では金がよく使用されているので、金が殆ど使用されなかったのが中国の古代文明の特色であるとさえ考えられていた。

したがって、殷晩期の時代に可成りの数の人面をはじめ金製品が発見されたことは、この三星堆の遺跡が世界から注目され、一種のブームを惹き起した理由でもあった。

では見出しの金面人頭像とはどのようなものであったのか。頭の形が平頂のA型と、円頭のB型の2型に分かれる。A型は2件でともに後頭に長い編髪を垂らす。金面を貼りつけた下の青銅の顔の造型はK2出土のB_a型とほぼ同じで、金面人頭像のK2②:45(挿図21)は、B_a型のK2②:118に似て、下脛から頬骨、頬骨から上嘴唇の間の皺曲もふかく、眼から下顎までがすづまりの、チンクシャに近い形である。これに対してK2②:115は、B_a型人頭像のうちのK2②:17(挿図16)に似て皺曲も浅く、間延びした型である。従ってA型金面人頭像は、B_a型人頭像の二つの特徴的な形をそのまま用いたものであり、顔面の大きさも同じである。なおK2②:45の金面は額の中程から下顎までであり、K2②:115は眉の線から下顎までであるので、前頭から後頭にかけて被せた頭髪或いは冠様のものの形はことなっていたと考えるべきであろう。

つぎのB型は円頭で、人頭像のC_a型K2②:58と殆ど同じ造型であるが、金面人頭像のK2②:137、K2②:214(挿図22)の前髪の線から下顎までが17.8釐であるのに対し、K2②:58はやゝ小さく約16釐である。二つとも胃を被った武人であろうと考えられている。

以上のようにA型・B型の金面人頭像は、それぞれB_a型・C_a型の人頭像を造型の基本にしたものであるが、この2型4件に金面を貼ったのは何の目的からであろうか。B_a型・C_a型人頭像群のなかの地位の上の者を表わそうとしたとする考えもあるが、円頭のC_a型人頭像は1件しかなく、B型金面人頭像の2件を上位者とするのは必ずしもできないように思う。若し上位者に金面をつけたとすれば、大立人像や回字文冠のB_b型人頭像などにも金面をつけた痕跡があってもよいのではなかろうか。

私はこの金面人頭像は夜間に使用したものではなかったかと考えている。暗夜にゆれ動く簪

火の光によって顔面の様相は瞬時に変化し、且つ眼は暗く沈んで虚空のような感じになり、しかもこれらの金面人頭像は、人頭像や D 型人面と同じように両眼の焦点が合っていないので、これを見る者は虚空に引き込まれるような恐怖を感じ、そうした雰囲気の中で、呪師か巫が唱える神のお告げを聞いたのではなかろうか。古代社会では、巫や呪師などは特異な存在であったが、人頭像に金面を貼ったのは、地位を示すよりも、宗教的な機能を考えたためではなかろうか。

I-5 立人像

立ち姿の人像は、大小、姿勢など多様であるが、何と云っても有名なのは K2②:149・150の大立人像(挿図23)、本稿の冒頭にふれたのもこれである。高さ約70釐余の台座の上に、身長180釐(冠を含む)の直立した人像がのる。胴体は細長く、丸太を立てたような感じであり、腰や足は太く、脚も大きく、跣である。左右の腕・手は大きく誇張され、両腕で何かを抱くような姿勢であるが、手は親指とその他の4本指で円筒をつくり、指の筒の内に何かの祭祀用具を握っていたのではないかと考えられている。右手は右頬の高さにあり、左手は左胸の前にある。左右両手の円筒はずれているので、両手で一つのものを持つのではなく、それぞれ別個の器具をもったとみられている。

顔は細面で、頬はやゝこけた感じであるが、眉、眼、鼻、下顎などは誇張される。眼は大きく見開き、眉も太く、鼻梁は眉間から真っ直ぐに通る、鼻頭は大きな三角形で高い。耳も大きく、雲雷文をつけ、左右の耳たぶには耳飾をつける孔が一つずつある。口は一文字に引きしめられ、左右両端は下に折れ、下顎の骨格はやゝ前にせり出し、顔面に緊張感をたゞよわせている。このような顔面の造型は、人面や人頭像にも共通しているので、改めて後にまとめて述べる。

頭上には回字文冠をつけ、さらにその上に変形させた獣面をつけ、獣面の眉間上部には円形の太陽を象徴するハロの形の文様をつける。獣面は前部のみで、後部にはない。後頭部の生え際は耳の中段やゝ下にあり、回字文冠の下の毛髪があった部分に、斜めに管をつけていた孔が残るので、後頭部で髪を束ねていたと見られている。おそらく髪を束ねた鬘のようなものをつけていたのであろう。

衣服は、一番上側に片袖衣をつける。中間の半袖の短衣は、領、袖口、衽口が見えるに過ぎない。内衣は最も長く、文様は裾に簡略化した獣面があるに過ぎない。外側の片袖衣は右側のみに袖があり、左側は肩、袖ともない。この上衣の左前・後の身頃に2対4件の変形竜文が上下2段に配されている。この竜は口から長い紐状の舌を垂らし、その先端は幾らか上に巻き、足の爪は球形に表現され、可成り特異な竜形である。そのほか右の身頃には、横に倒した獣面

文がある。この獣面は眼が大きく、鋸歯状の冠をつける。

このような紋様のある三襲の衣服を着、大きな冠をつけた人物は、足こそ裸足であるが、足首上部に3個の鐃をつけてもいるので、高位の人物であることには間違いない。

次に興味ある人像は獣首冠人像（K2③：264）である（挿図24）。下半身が失われており、全器の残高は40.2釐、頭上に大きな獣首をそのまま冠にしたものを載せるので、下半身があったとしても人像の身長は40釐を切れるであろう。顔の造型は大立人像・人頭像などと同型である。冠は動物の首から上をそのまま冠にしたものである。この動物は第二章で述べる神壇の基礎を構成している（挿図46）。獣首の口の左右両側面にハコ文があり、眼も同形であり、下顎にはともに誇張された顎骨がある。

この人像の両腕は大立人像と似ているが、右腕はややく右肩の前にある。掌指は同じように円筒状をなすが、この場合も左右別々のものを把握していたと考えられる。この人像がどのような機能をもつとされていたかは明らかでないが、獣首冠の口辺にはハコ文をつけ、大きな一對の羽根をつけていることから考えて、この人物は飛翔力があり、太陽神の信仰に関係すると見ることができる。この人像の後頭部の生え際は大立人像と同じく、耳の中段や下になっているので、頭髮全体は束ねて冠の内にいれていると考えられていたものであろう。

このほか種々小型の立人像・跪坐像があるが、これらの顔などの造型も基本的には人頭像などと同じであるので、必要に応じて次節以下に引用する以外は省略する。

I-6 顔の造型

以上述べて来た所から、人頭像・人面・立人像の顔面の造型がほぼ同じであることがわかりたいと思うが、これらを眺めた際、先ず気付くことは、眼が異様に大きいということである。いずれも精一杯見開いている状態である。例えば大立人像の顔面の拡大写真（『陳著』図版1）（挿図25）によって上下の瞼の最も広く離れた所の長さと、眼頭・眼尻を結ぶ直線を比べると、上下の瞼の間は、眼頭・眼尻の間の2分の1強である。これを実際の生人の3分の1弱と比べると可成り大きい。そのほか虹彩の彩色が明瞭に残る唯一の資料であるB型の跪坐人像（K2③：04）では、虹彩部分が上下の瞼の内接円になっており、上下の瞼の最も広く離れた場所にあるわけであるが、この上下の間隔は、眼頭・眼尻の間の2分の1である（挿図26）。この比率は、立人像・人頭像（K1・K2出土を含む）でも2分の1より大きなものが多いようである。この傾向は、人面のD型でも同じである。いずれも顔が縦長の構造であり、上下の間隔を大きくとり易いからでもある。しかし人面のC型は、顔面の形が方形或いはやや横長であり、従って眼も横長に造られているが、眼そのものの縦と横の比はやはり縦が横の2分の1或いはそれより大きくなっている。従って人頭像などと同じように眼は大きく見開か

れているように表現されている。

先きにもふれたように、虹彩部分が残るのは、B型跪坐人像の一例（挿図26）のみであるが、この虹彩の中心即ち瞳孔が、眼中の何処に位置しているのか、換言すれば縦の間隔の最も広い所が何処にあるかということでもあるが、左右の眼とも、眼頭と眼尻とを結んだ線の中央より眼尻即ち外側に寄った所にある。この点は、立人像、人頭像の大半も同様である。従ってこれらの像の左右の眼の視線は外側に拡散して焦点を結ばなくなる。この点は人面のD型も同じである。

これに対してB型・C型の人面は、その瞳孔のあると考えられる位置はむしろ眼頭寄りにあり、両眼の視線は焦点を結ぶ。人がこの面の前に立てば、その人は自身が注視されているような印象を受ける。これに対してD型人面や人頭像・立人像などは、これを見る人よりも、その人の背後の何かを見ているような印象を与える。この眼は、饕餮文の眼と同じで、見る者に何時の間にかその眼のなかに吸い寄せられるような不安をともなった畏怖感を与えるが（前掲「饕餮文の彼方」、同補正）、C型人面などの眼は直接的な圧迫感を与える。

その上、注意すべきことは、人面をも含めて、すべての眼球は、眼頭と眼尻を結ぶ弧線によって上下に分けられており、しかもこの弧線は上下の臉のうち上臉に近い所を通っているため、弧線の上の部分よりも下の部分が大きく、しかも下の部分は、弧線の所が最も凸出し、下臉に近づくとつれて内に収縮する球面をなしているため、瞳孔は下に向う球面に在ることになり、視線は下に向う。したがって人頭像・人面・立人像——たゞし小型の立人像は除く——などは、高い所から下を見おろすような位置におかれたであろう。これに対して3件の獣面の眼は、左右の凸出した虹彩部分は上を向き、しかも両眼の方向は外に向っているため、焦点の定まらない眼で下から上を見るような低い位置におかれたと考えてよい。従って獣面の眼・顔は落ち着きのない心の情態をあらわしていることになる。

このほか眼に関連して臉の問題がある。すべての人頭像・人面・立人像の臉は、上下いずれの臉も眼球に接する所、即ち臉の縁が薄い皮膚のようにになっている。所が実際の人間の臉は、縁の内側に睫毛が生えていることもあって、幾らかふくらみをもっている。では一体どのようにすれば人頭像などのような形の臉になるのか、所謂アカンペーのようなことをすれば一時的には臉の裏を露出させて、人頭像に近い形にすることができるが、指を離せば直ちに正常な形にもどってしまう。従って永続的に人頭像のようにしようと思えば、臉の縁にそって一部を切除するより方法はないであろう。楊銘氏の「試論氏与蜀的關係」（『三星堆与巴蜀文化』1993年11月、巴蜀書社）に引用される「羌戈大戰」という説話には、羌族が広漠地区の北の茂汶地区に進入する以前、この茂汶地区を占居していた戈基族は、眉骨と睫毛がないために雨が眼球を浸したので、戦に敗れたとしている。それは、この戈基族の眼の状態を知った天爺——天の神——がその眼の状態は天意に反するものと考え、戈基族を絶滅させようとしたからであると楊

銘氏は解している——この説話を A 本とする。一方私が読むことのできた「羌戈大戦」（『羌族民間故事選』所収、上海文藝出版社 1994年）——これを B 本とする——には、戈基族について、頬骨が高く、短い尾があると述べるのみで、眉骨と睫毛のことにはふれない。白衣をまとい、白髪・白鬚の老人が羌人と戈基人の夢にあらわれ、羌人には武器として白い石塊と棍棒を各人に準備させ、戈基人には雪を丸めた団丸と麻の稽とを準備させ、翌朝二つの族を戦わせたところ、戈基人の雪団丸と麻稽とでは到底太刀打ちできず敗走したという。この白衣の老人は、おそらく羌人が祭る白石の岩の精であり、白石岩を崇拜しない戈基人を滅亡させようとしたものであろうという（「白石頭」、前掲『故事選』所収）。

ところで、A 本にふれる眉骨とは、眉毛の内側にある眼窩の前部上縁を構成する部分で、骨そのものがやゝ厚くなっている——北京原人など古人類では特に目立つ部分である。三星堆出土の人頭像などを側面から見ると、眉骨の表面の眉毛と眼球を覆う上瞼の間に凹んだ浅い溝状の部分があり、眉骨の存在ははっきりしている。B。型の K2②：17人頭像（挿図16）は、顔面の上半は比較的ノッペリした印象を与えるものであるが、この像でも眉骨の下の浅い溝状の部分は明瞭であるので、A 本の戈基人の記述と三星堆の人像などとは一致しないと考えるべきであろう。

一方、睫毛がないということは、石製や金属製の人像では一般的なことであるが、それにかわって上下の縁に丸みをもたせ、毛根部分を示すことによって睫毛の存在を暗示する。しかし人頭像や人面では、瞼の裏側を露出させたような薄い皮膚が眼球に接している。これは睫毛の毛根の存在する瞼の縁部を薄く削ぎとったからではないかと考えられ、当然睫毛はなくなる。おそらく広漢地区を占拠していた当時の人びとの間で、宗教的な見地から、瞼の縁を切除するということが、イニシエーションのような形式で行われたのではないかと私は想像している。

しかし、このような瞼では雨水を防ぐことのみならず、眼に入る光の量を調節することにも不便であった筈である。しかも当時の医学的技術がどのようなものであったかは全く不明であり、危険の大きな行為であった筈で、三星堆の人びとを衰亡させる原因の一つともなったであろう。

また頬骨が高いという B 本の記述は、人頭像などがいずれも頬骨の下縁の線を強調するのと相通じるとも言えるが、その線は高山の稜線のように鋭く細い線状に表現されている。どのように頬骨が張っていても、このような線状にあらわれることはない。K1出土の女性かと言われる人頭像（K1：2）が普通の表現である（挿図8）。私などは、眼を大きく見開かせるために、下瞼を大きくひき下げたためにできた皮膚のタルミかと思った程である。おそらく頬骨の張りを誇張するために用いた表現法であろうが、不自然な方法で、或いは何か宗教的な意図があったのかも知れない。

さらに下顎の表現も特異で、皮膚の上から下顎の骨の形を貼りつけたように表現している。

下顎を前方に突き出し、上下の歯を食いしばるようにすれば、下顎に力がいり、骨が目立つようになるが、人頭像や人面ほどに骨が浮き出るようにはならない。このように表現したのには、何か特別の意識が働いていた筈であるが、この点については、次章で鳥の形を考える際にもう一度ふれる。

いずれにしても、「羌戈大戦」—— A・B 両本とも——に描写される戈基族の顔の特徴は、三星堆の人びとが作った人面・人頭像などの特徴と通じる点もあるが、厳密には同一とは言えない。この説話の成立年代或いは成立の過程なども不明であり、また戈基族と呼ばれる少数民族についても詳しいことは不明であるので、現在では三星堆の人びとと戈基族とを結びつけることは避ける。したがってこれらの人面・人頭像などで表現された人びとがどのような源流を継承した人びとであったかについては、現在の所不明と言わざるを得ない。

しかし、これまで主として個別に研究されて来た人面・人頭像・立人像が、本稿で述べて来たように、下顎や眼の造型において共通した表現法があり、それによってそれぞれの神秘性をあらわし、中原地域の饕餮文——眼の形は全く異なるが——のもつ神秘性とも共通する技法——両眼の焦点を結ばせないという——をもっていたことが明らかにされたと思う。その一方で特異な面具である凸目獣面が、実は人面のうちの B 型・C 型とともに祭祀儀礼として用いられ、B 型・C 型の眼には、その目的にあった別の表現法がとられていたことが明らかになった。このようなことは、凸目獣面・人面・人頭像・立人像などを保持し、統一的使用しようとした人びとが、可成り統一された宗教意識をもつ集団であったことを示していると言うことができよう。

II - 1 嘴が曲がった鳥

三星堆出土の鳥の形をした青銅器で、人びとが注目するのは大鳥頭 (K 2 ② : 141) と呼ばれるものである (挿図 27)。高さ 40.3 ㎝、幅即ち嘴の先端から後頭部に達する低い鶏冠様のものの末端までが 38.8 ㎝ある大型のものである。嘴は太く、中央部で鋭角に内に曲がりこむ。眼も大きく、虹彩の部分は円角方形で、幾らか球状に盛りあがる。その後部に三角形に近い肉腫のようなものが虹彩から独立して付いているため、この二つの部分を容れる眼窩と瞼の後部は、弧線に囲まれた三角状になり、その眼尻の部分は鋭角に下垂している。この眼のように眼尻が三角形になっている眼を便宜的に三角眼と呼ぶ。

頭の前額部には方円の孔が前方に向かって開いており、また嘴の水平部分の先端上部には三角形の孔がある。この二つの孔には鶏冠か飾羽のようなものを挿したと考えられている。K 1 出土の金杖 (K 1 : 1) には、4 羽の同型の鳥が描かれているが、その嘴の彎曲部——大鳥頭ほどに鋭角的な屈曲ではない——には巻きあがった小さな飾りがある (挿図 28)。しかし大鳥頭

の孔は大きいので、可成りの太さのものを挿した管である。例えば湖南省寧鄉県黄材出土の四羊尊と呼ばれる大方尊の腹部の文様は、太い足で立つ鳥の姿を描くが、頭の前額部から長く太い冠羽をつけ、尾羽も上と下に巻き込んだ飾り羽根になっている（挿図29）。大鳥頭の前額部にもこのような冠羽を挿したと考えられる。たゞ金杖の鳥も四羊尊の鳥も、眼は円形で、大鳥頭の三角眼とは異なるので、それぞれの鳥が象徴するもとの鳥が異なっていたことを念頭においておく必要がある。

さらに注意すべき点は、下嘴の造型である。下嘴の先端から眼の下にかけて、下嘴の左右両側にある骨質の部分が強調されて、皮膚の上から骨か何かを貼り付けたように表現されている。この貼り付け部分が下嘴の左右の形を構成し、上嘴との合せ目になっている。実際の鳥を見ても、種類によって左右の骨質部分が目立ち、それに挟まれた下嘴の下面の三角形の部分は柔軟な皮と肉質になっているものがある。

この下嘴の特徴は、後述する嘴の真っ直ぐな鳥と比較すると、この大鳥頭のように三角眼をもち、嘴が曲った鳥のいま一つの特徴でもあることが明らかである。例えば2号大型神樹の上につけられた鳥（K2②：194、高さ約15種）、同じく2号大型神樹上につけられていたと考えられている大型の鳥（K2②：194-1、高さ21.4種）（挿図30）もこの三つの特徴を備えている。或いは青銅製の鳥型鈴（K2②：103-8）（挿図31）、板状で何かの装飾品として使用されたB型鳥形飾（K2②：70-9）も同じように三つの特徴をもっている。或いは三角眼が退化して、眼全体は円形に近くなり、眼尻に小さな突起状の切り込みを残すに過ぎなくなったE型銅鳥（K2③：239-1）（挿図32）やA型鳥形飾（K2③：193-4）なども、この下嘴の骨質の部分は明瞭な形でつけられている。この点は、人面・人頭像などの下顎骨の強調と同じ意識にもとづくものと考えられるが、改めて後述する。

ところで、この三角眼は鳥の眼として以外にも使用される。E型（K2③：149）、G型（K2③：70-7）の二つの銅鈴は、銅鈴の縁の形に合せて三角眼を細長く延ばし、左右の両縁を飾るようにしている。特にG型（挿図33）は、三角眼に挟まれた中央部に大きな口を開き牙齒をむき出しにしており、口の左右の前端にあるのは先端の尖った大きな牙となっている。この形の口は陝西省城固県蘇村出土の青銅製獣面にも見られるが、この獣面の眼は饕餮文の眼と同じ形であり、獣形の口と違和感はない。銅鈴の方はある種の鳥に特徴的な三角眼を変形させたものと、牙をもった獣口を一つの器として一体化されたことになる。おそらく三角眼が簡略化されて行く傾向とともに、三角眼のもっていた意義が稀薄化した結果、三角眼と獣口とを一体化したと思われる。或いは城固県出土の獣面の影響もあるかも知れない。

たゞし、口を大きく開いて牙齒をむき出しにしているのは、人や悪霊を威嚇して追い駈う行為であり、一方細長く変形しているとはいえ、この三角眼をもつ鳥は、大鳥頭でも感じられる如く、力をもった猛禽であり、その鳥の力を恐れていた人びとの意識が働いて、この鈴の音は

悪を追い敵うと考えられていたものであろう。この大鳥頭は首の下端の左右と前部に小円孔が各一つあり、固定のために使用したもので、この鳥頭は建築の装飾として使用したものと考えられているが、おそらく単なる装飾ではなく、悪霊を避ける目的があったであろう。現在の資料では、この大鳥頭のような三角眼をもった鳥は三星堆以外では発見されていない。

なお小型神樹の桃形果実の上につけられていた人面鳥（K2③：272）の眼は三角眼であり、顔面の形にあわせて横長の円角方形にまとめられているが、その眼の構成要素は三角眼と同じである（挿図34）。この人面鳥は頭上には冑、胸と膝には鎧の一部と見られる胸当・膝当をつけているので、戦士とも見られていたと考えられる。口は人面などと同じく一文字に結ばれ、下顎骨も強調されているので、力を必要とする存在であり、猛禽と同じ三角眼をつけたものであろう。

II-2 嘴が真っ直ぐな鳥

『報告』に掲載される A 型鳥（K2③：193-1）は、高さ34釐の大型の遺品に属するが、前節の鳥類とは異なり、嘴は方錐形で、微かに弯曲するのみで、殆ど真っ直ぐであり、長さは約6釐ある（挿図35）。頭上に5支に分かれた高さ9.1釐の大きな鳳冠羽がつく（1支は後頭に沿って下に垂れる）。頭から頸・胸・腹部にかけて魚鱗状の羽文が被う。主翼は小さく、尾羽は長く下に垂れる。眼は円形で、頭部からやや突出している。このような眼を円眼と呼ぶ。この鳥の形は後世の鳳凰の先駆をなすものと言いうことができるので、鳳鳥と呼んでおく。

三星堆の出土品でこれと同形式の鳥は、他に円尊の肩部の残片上に残る鳥（K2③：23）で、方錐型の直嘴と円眼をもち、頸には魚鱗状の羽文をつけ、冠羽は3支に分れる（挿図36）。この鳥は円尊の肩上の稜として鑄造されたもので胴と尾羽は板状であるのに対して、頭と胸はややふくらみをもっている。尾は上に巻き上がる。このような直嘴と円眼をもった鳥は、Ⅳ式円尊2器（K2②：79とK2②：146）やⅤ式円尊3器（K2②：127、K2②：151、K2②：129）、或いはⅢ式円壘（K2②：159）の、いずれも肩部の稜として作られている。頸にはいずれも魚鱗状羽文をつけるが、いずれも冠羽がないので、一見した所では水鳥のようにも見えるが、冠羽を省略したものと考えべきものである。

このほか青銅器の文様として描かれたものもある。Ⅰ式円壘（K2②：70）の腹部中央の主文である饗饗文の両側に、主文に背を向けて鳳鳥が描かれている（挿図37）。円眼で、頭上に3支の冠羽があり、頸から胸にかけて魚鱗状羽文があり、主翼は3支に分かれて展げられている。最初にあげた A 型鳥は腿以下が欠損しているため、足の形などは不明であるが、この壘の鳳鳥文は、先にあげた四羊尊と同じく大きな爪をもった足であることがわかる。尾羽は下に垂れる。

このような鳳鳥型の鳥は、三星堆以外では、陝西省岐山県賀家村で発見された青銅製の罍の左右の柱の上に蹲った1羽ずつが立体形の飾りとして付けられている。冠羽は3支、円眼、直嘴で、頸から腹部にかけて魚鱗状羽文で飾られる（挿図38）。また江西省新干県大洋洲の商代大墓から発見された二つの円形の鼎（資料番号は XDM：26と XDM：27）の左右の耳にはそれぞれ1羽ずつ鳳鳥が蹲まっている。頭に鶏冠状の飾りをつけ、円眼・直嘴で、頸には魚鱗状羽文をつける（挿図39）。また文様としては陝西北部の清澗県張家塬出土の青銅尊の腹部に、中央の主文である饗饗文の両側に主文に背を向けて描かれている。三星堆のI式円壘と同じ配置である。冠羽は3支、頸から尾羽の先端にかけて魚鱗状羽文があり、尾羽は水平に伸び、先端は下垂している。眼は円眼であるが、嘴は器の影に入るため形は不明である。実を言えばI式円壘でも、上嘴と下嘴が開いているようでもあり、先端がどうなっているか判然としないが、両者とも四羊尊と同じように軽く嘴を開き、嘴の先端は微かに曲がっていたのではないかと思う。たゞこの画像的鳳鳥の嘴の曲がりとは、猛禽類の曲嘴とは異なる。

こうした鳳鳥は、この節の最初にあげた A 型鳥、或いは一式円壘の鳳鳥が完成形であるが、その先駆形の鳥がどのような鳥であったかは不明である。少なくとも三星堆では、三角眼・曲嘴の猛禽が中心的な存在であった所に——装飾品などに猛禽を模したものが多いことから考えられる——、この円眼・直嘴の鳳鳥が何かの理由によって移植され、猛禽に影響を与えたのではないかと考えられる。例えば小型神樹の二枚の葉の中心にある桃形の果実の上に立つ2件の鳥（K2②：213——挿図40——と K2③：47）はともに頭上に大きな冠羽をもち、尾羽の上の3支と下の2支も展開し、それらの先端は桃果型で、その果の中央に飾りの孔をあける。眼は退化した三角眼、曲嘴も軽微、胸から腹にかけてやゝ粗放になった魚鱗状羽文をつける。全く同様なことが A 型鳥型飾（K2③：193-4）にも見られる（挿図41）。特に注意すべきものは、一号大型神樹（K2②：94）上の鳥である。同型式の鳥は少なくとも9件が確認されている。巨大な曲嘴と強調された下嘴の骨質をもち、体形は完全に猛禽と同じであるが、眼は完全な円眼であり、そのことはこの鳥の表情を、三角眼の猛禽よりはるかに穏やかなものになっている（挿図42）。

II-3 鳥と人との関係

これらの鳥は一般に神と人間との間を結ぶ使者と考えられている。然し単なる使者と言うより、人との間により強い関係が考えられていたのではなかろうか。第1節にあげた人面鳥は、人面をもった鳥と考えられているが、この人面は単なる人の顔ではない。この人面の眼は先にもふれたように、猛禽の象徴である三角眼を人面の形にあわせて円角方形につくったものであり、この眼と人面の口・下顎とを一つの顔面に収めたものである。これと類似した人面鳥は、

高さ53.3㎝の青銅製の神壇（K2③：296）とよばれているものにもあらわれる（挿図47）。この人面鳥の顔も三角眼を円角方形とし、口・下顎などの造型も同じである。たゞ神壇の人面鳥は頭上に花形の冠をつけ、主翼も小さいので女神とする説（趙殿増「三星堆青銅神壇賞析」、『文物天地』2001年5号）もあるが、むしろ雌性の鳥であり、女巫に替って神を神殿に招き入れることを目的としたものであろう。この神壇は第5層まで残り、第1層は大きな羽翹をつけた獣類の形であり、この獣が全壇を支えている。その頭部は第1章第5節で見た獣首冠立人像（挿図24）の冠と同形で、口の左右側面にハロ文があり、この神壇そのものが恐らく太陽神を祭るためのものであったと考えられる。先にふれた小型神樹の人面鳥（挿図34）は、残高50㎝の木の頂点の二枚の葉をつけた桃形の果実の上に立っていたが、この木はおそらく神の依代の一つであり、この人面鳥は、神壇上の人面鳥と同じく太陽神を呼び降ろす働きをしていたと考えられる。その顔が鳥の三角眼と人間の口・下顎の合成であることから見て、人と鳥との間の交感にすぐれた力をもっていることを示すと考えられていたのである。したがって三角眼をもつ鳥——本来曲嘴の鳥でもあるが——は、人間と意識を疏通する能力をもつと考えられていたのである。

一方直嘴円眼の鳳鳥には、三角眼の鳥のように、人間の部分と合成されたと見られる形態はない。そして銅器の文様或いは飾りとしても、主文の夔夔文から独立し孤立した存在であった。殷周時代の青銅器の鳥文である夔鳳文はもともと夔夔文の部分的な変形から成った文様であり、夔夔の力をより強化する働きをもつ。また殷墟の西北岡1004号大墓出土の牛大方鼎の主文牛首文の両側に、中心の牛首に向って鑄出されている鳥は殷晩期に特有の鷓鴣系の鳥であり、夜行性と肉食の猛禽としての力をもち、悪霊を追い散らす力をもつものとして用いられたと考えられている。しかしこの中原地区に盛行した鷓鴣系の鳥も、或いは中原の夔鳳文も殷末周初の頃になると、立派な冠羽をつけるようになり、尾羽も装飾化される。これに対応するかのようになり、甲骨文字や金文の佳字＝鳥字が、悪——崇——の出現を予告する意味から、瑞兆を意味する文字に変化する。このような中原における鳥に対する意識の変化が、長江流域から四川にかけて影響を与えたことを示す明確な証拠はない。従って陝西・四川・江西に見られる鳳鳥が、どのような経過で出現し、またどのような働きをするものとして人びとに意識されていたかは不明で、少なくとも現段階では、時代・社会のなかで孤立した存在であったと言わざるを得ない。

ところで、先にも述べた如く一号大型神樹の鳥は円眼・曲嘴であり、この円眼は鳳鳥の影響を受けたものではないかと推測した。これに対して二号大型神樹の鳥は三角眼・曲嘴であり、三星堆の社会においてより重視されていた鳥であると考えられる。もしこのように二つの大型神樹の鳥のもつ性格にちがいがあると認められるならば、次の問題として、二つの神樹とそれぞれの鳥のもっていた宗教的役割りにもちがいがあつたのではないかということが検討されねばならない。

第二節でふれた小型神樹上の2件の鳥は、桃形の果実の上に、足の爪で果実をしっかり把むようにして立っていた(挿図40)。同じことは神樹上の人面鳥(挿図34)にも見られ、また一号大型神樹上の9件の鳥にも見られる(挿図42、44)。いずれも2枚の葉にはさまれた桃形の果実を身体に比して大きな足の爪で把みながら立っている。所が二号大型神樹の鳥は、2枚の上下にひらいたうちの上の葉の上に立ち、桃形の果実は2枚の葉の間にその頭をのぞかせているにすぎず、鳥と果実とは直接には接していない。一方小型神樹上の2件の鳥は、いずれもその冠羽や尾羽の先端を桃果の形にしていることから見て、この鳥はその果実の精を身につけており、それを羽飾りにつけることによって表わし、神をその神樹に誘ったものと考えられる。この2件の鳥は、一つが高さ8釐、嘴から尾羽まで4.5釐、一つは7.8釐と4.3釐で、ともに小型である。

これに対して一号大型神樹の鳥は、同じように桃形果実の精をうけていたが、飾り羽根や冠羽がないので、二号神樹の鳥即ち原型としての鳥により近い形をしていた。大型で高さは20釐あり、主翼が破壊されているが、その残部の形から飛翔の形をしていたと考えられている。より高くより速く飛ぶことによって神にはやく近づくものと考えられる。その際にも果実の精をうけていたことが神を誘うことを効果的にしたと考えるべきであろう。

一方二号大型神樹の鳥はひらいた2枚の葉のうちの上の葉の上に立ち、直接果実には接していないので、自らの身体に果実の精をつけて神に近寄ったと言うより、人から托された願いの言葉を神に告げ、神の降臨を誘ったものであろう。この場合にはあくまでも言葉が重要であったのだ。この鳥は三角眼・曲嘴で、人面などの下顎の骨と同じように下嘴の骨質が強調されるのは当時の鳥の基本型をなしていたと考えられ、その鳴き声によって神に語りかけたものであり、人と同じように言葉に重点がおかれていたと考えられる。勿論下顎骨や下嘴の骨の強調は、人や鳥の力の誇示でもあった。

これに対して、一号大型神樹の鳥は、三星堆文化のなかで桃形の果実に対する宗教的な意識が人びとの間に形成されるようになった時期のもので、下嘴には習慣的に骨質を使用しながら、桃の精の力が有力になって来たために、言葉そのものの重要性が薄れて来たと言うことを考えてみてもよいのではなかろうか。おそらくこのような変化は、三角眼の退化と円眼の使用という変化とも対応していた筈である。

このほか、一号大型神樹と二号とでは、その神樹を守護するものにも違いがある。二号の守護役は、頭に冑の一部と思われるものをつけ、対襟半袖の膝までの衣服を着た人間である(挿図43)。二号は、樹根が三方向にアーチ形に分れた、そのアーチの中央の方形の台の上に跪座する。その顔は人頭像や人面と同じ造型である。頭上の冑と考えられているものは、人面鳥(挿図34)やI-6で紹介した跪座人像(挿図26)と同じである。左右の腕は、発見時には折られていたが、復原されたものによると、水平に身体の前面にあげ、身体の正面で右の指掌が

上、左が下になって、何かを棒持する形になっている。刀形の璋のようなものを持っていたのではないかと考えられている。三星堆では刀形の玉の璋が多数発見されているが、悪を斬ることのできる護符の働きをしたと考えられている。

これに対して一号では、最下部にあって樹幹を支える直径92.4~93.5釐の座圈に前足をおき、縄をなつたように身体をくねらせ、樹幹に沿って上昇させる竜がついている(挿図44)。背の上に人間の掌に似た爪の長い五指がある。また腹下と尾部に刀剣状の羽根のようなものがある。この羽根は長い触手のようなものの先端についているので、おそらく触手を動かして戦ったり、威力を示したものであろう。この竜は口を大きく長方形にひらき、口一杯に舌と思われるものがある。舌には上下2段に並んだ6個の小円凹形がある。眼は円眼であるが、その眼球をおさめるやゝ縁取りの幅広い眼の縁には、縁の内側の上下左右に小さな切り込みがあり、一見した所ではA型・B型の小型獣面(例えばK2③:221、K2③:231)の眼と似ている(ただし獣面では切り込みは左右のみ)。一方この竜の口は、B型青銅竜形飾(K2③:145、挿図45)の口と同じであり、共通した目的で造られたものであるが、その意図は明らかではない。ただしこの竜形飾の口の上にある角状のものにつけられた眼は青銅製の蛇の眼と同じで、I-1で述べた獣面と同じく鬘鬘文の眼を変形させたものであり、竜形飾と呼ばれるものは、本来的に蛇性の生物を象徴していたのではないかと思う(但しこれは頭部のみが残り、胴・尾は失われている)。これに対して一号神樹の竜は獣性を兼ね備えていたのかも知れない。長い爪の五指をもち、触手の先に刀剣状のものをつけているのも、こうした性格によるのではなかろうか。

このように見て来ると、一号神樹と二号神樹の間には、可成りの違いがあり、二号神樹では、神と使者としての鳥と人によって構成されていたと言ってよい。これに対して一号神樹では神と鳥とのほかに、桃形果実の精が働き、人に代って獣性をもった竜が守護の役割りを担うようになり、人は神樹の場からは退場している。この一号神樹は高さ396釐、底座の直径93釐余の巨大なものであるので、やや離れた場所に生人の神官や守護兵が控えていたのであろう。宗教的な観点から見れば、二号神樹は原理的であり、一号神樹は現実的であると言ってよい。

しかしこの一号神樹よりもさらに複雑な様相を見せるのは、先にふれた神壇である(挿図47)。最下層にはハロ文をつけ、大きな羽翼をもった四足獣がある。この獣の眼はさきにふれた江西省新干大洋洲出土の鳥耳円鼎(XDM:26、XDM:27)の夔竜形の板状の足の竜の眼と同型である(挿図46)。太陽信仰に結びつくものであろう。その上の第2層の円形の座の上には上面がやゝ反りかえった庇のない角帽様の冠をつけた4人が立っている。この立人の高さは11.2釐で、両手は胸の前で下端が鈎状に分れた棒のようなものを棒持している。その顔の造型は人頭像などと同じである。この立人は、神と人との間を結ぶ巫祝ではないかと言われる。その帽の頂面に頸が長い板状の獣面の側面を表現したものがのる。これは『報告』などでは人面とされているが、眼の形、渦巻状の小鼻、下顎の突出具合、頸の長さなどから見て、I-1で見た獣

面と同じ蛇性のものの表現と考えた方がよい。但し眼の虹彩部分は描かれているが、凸出はしていない。その上に高さ9.1匁の四つの山形座があり、その4山の頂部の上に、方形の建築がのる。4面みな高さ10匁あり、その各面の中間部分は高さ3.5匁、上框の幅9.7匁の窓状になり、其処に大小造型とも同一の跪坐した人像5個が並び、ともに上腕を水平に伸ばし、左掌指を上、右を下にして胸の前で合わせている。何かを両手で捧持しながら祈りをしているかと思われる。各面の上框中央には、高さ約4.6匁の人面鳥をつける。頭に大きな華冠をつけ、主翼は開いて飛翔の状態を示している。顔の造型は、小型神樹上の人面鳥（挿図34）と殆ど同じで、眼は三角眼を円角方形にまとめ、口は一文字に結び、下顎が強調されている。耳も同型で、共に耳たぶには耳飾りをつける小孔がある。神樹上の人面鳥は小鼻が渦巻状で、鼻頭も大きく、頭には胛の一部と思われるものが残り、武人（勿論男性）を形どっているが、この神壇上の人面鳥の小鼻は図で見る限り渦巻をなさず、力みは見られない。左右に展いた華やいだ冠をつけ、腰に羽根状のスカートをつけているので、前掲論文の趙殿増氏は女神を象徴したものとしているが、私は神霊を誘うための女性の鳥を表わしたものであろうと思う。三星堆の遺物中には、明確に女性を表現したものが見当らず、K1出土の人頭像（挿図8）の顔が唯一のものではないかと言われている。この神壇が復原されたことによって第二の例が明らかになったわけであり、これによってK1の人頭像も女性のものでよい。たゞしこの人面鳥の図は復原された測図しかなく、『報告』に載せられた写真では、まだ頭が欠けたまゝである。もともと高さ4.6匁の小さなものであるので、復原後の拡大写真が発表されることが望ましい。この建物の4面に並んで跪坐する人像は、おそらく神を招くための言葉を詠唱しながら祈りを捧げていたものであろう。

さらにこの建物の四方に流れるようになった屋根の四隅には、それぞれ一羽の鳥が立つ。頭から背にかけて残欠した夔竜状の冠飾をつけ、曲嘴と簡略化された三角眼をもち、頸から胸にかけて魚鱗状の羽文をつける。頭を上げ、両翼を展げ、今まさに飛びあがらんとする状態である。或いは人面鳥を先導する役かも知れない。頭頂から足の爪先まで4.8匁である。この鳥は三角眼もやゝ簡略化され、曲った嘴の先端も短く、魚鱗状の羽文をつけ、冠飾を頭に載せるなど、猛禽と鳳鳥との習合形態である。従ってこの鳥は、典型的な猛禽である鷹への人びとの意識が弱まって来た段階の鳥であるといえる。

勿論このことはこの章の冒頭にあげた大鳥頭のような猛禽より絶対年代が下るということの意味はしない。K2に埋められていた多種多様の遺物は、ある時期に混在し、ともに使用されていたと考えるべきであり、その時期の人びとの宗教意識は可成り複雑な様相を呈していたと思う。大鳥頭は典型的な猛禽の形態をしているが、実際に使用する時には頭部に可成り大きな飾羽などを着けたこと自体がその事を物語っている。

さらにこの神壇においても立人の帽頂に載る獣面は、本稿の冒頭において見たように、もと

は三星堆文化の人びとに敵対し征服された人達の土地神の霊を表現したものであり、そうしたもので採り入れて一つの宗教的な世界を構成していたと考えるべきであろう。そしてこの神壇においてはじめて神と人との間に「性」が顕在化したと言える。

そして、降臨した太陽神の霊に酒食を供応し、さらには夜伽などをもし、太陽神の精霊を身に受けると考えられる女性は別に存在していたと思う。例えば女性像ではないと言われる K1 : 2 の人頭像が象徴する人物である。

この人頭像の頭頂はソケット状をなし、冠か頭髪をつけたと考えられるが、K1 出土の人頭像のうち顔面の大きなものであり、重要な人物であった可能性が高い。伊勢内宮に仕えた斎内親王に近いような性格の人物であったのかもしれない。この K1 からは飲酒器と考えられる尖底蓋が出土していることも、その人物の性格と相応ずると言えよう—— K2 からは出土していない。もしこの考えが認められるならば、K1 は女性祭祀者を中心とした坑であり、この坑出土の金杖 (K1 : 1) は、太陽神の霊を象徴するものであり、これを捧持したであろう女性の祭祀者の神聖な立場も示したと考えられる。これに対して大立人像 (K2 ② : 149, 150) を出土した K2 は、男の神官や奉仕者たちのものであったのではなかろうか。

このように考えて来ると、当時の太陽神に対する祭祀は、女性による秘儀としての祭儀と、男性による公開の祭儀とに分かれ、後者は社会全体の禍福に関する政治的な意味をもつようになったと考えられる。

插图

第 I 章



1 B型凸目獸面 K2②:148



2 A型凸目獸面 K2②:144



3 B型人面 K2②:153



4 C型人面 K2②:60



5 D_a 型人面 K2③:119



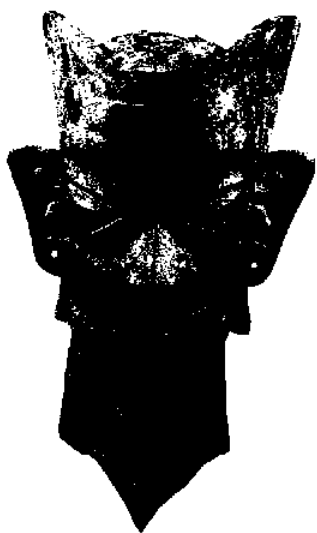
6 D_b 型人面 K2②:331



7 A_b 型人頭像 K1:6



8 A_a 型人頭像 K1:2



9 C 型人頭像 K1 : 5



10 B_a 型人頭像 K1 : 11



11 B_b 型人頭像 K1 : 72



12 B_c 型人頭像 K1 : 3



13 人頭像 (K1)?



14 A 型人頭像 K2②: 83



15 B₁ 型人頭像 K2②: 154



16 B₂ 型人頭像 K2②: 17



17 B₁ 型人頭像 K2②:118



18 B₁ 型人頭 K2②:90



19 C₁ 型人頭像 K2②:54



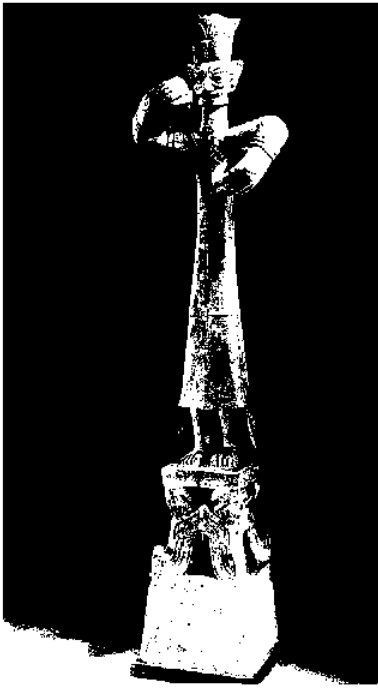
20 金製面 K1:282



21 A型金面人頭像 K2②:45



22 B型金面人頭像 K2②:214



23 大立人像 K2②:149, 150



24 獸首冠人像 K2③:264



25 大立人像頭面 K2②:149, 150



26 B型跪坐人像 K2③:04

第二章



27 大鳥頭 K2②:141



28 金杖(部分) K1:1



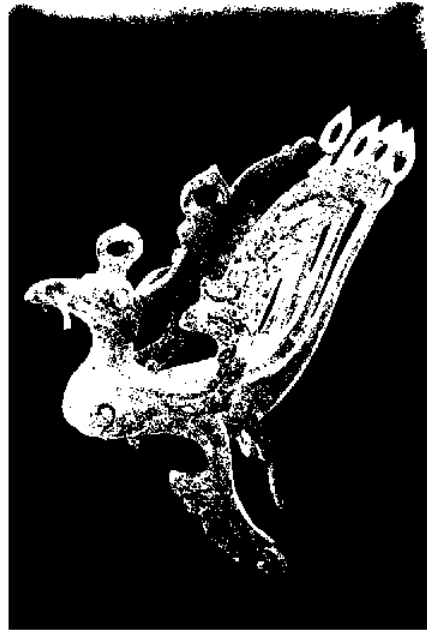
29 鳳鳥文 (寧郷県資材出土)



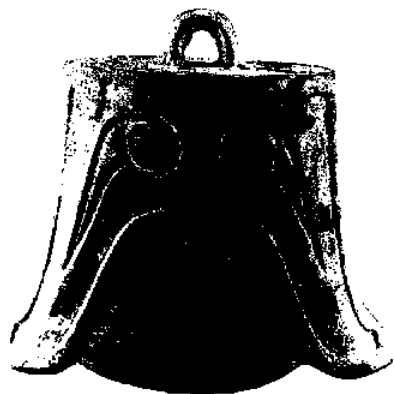
30 神樹上立鳥 K2②:194-1



31 鳥型鈴 K2②:103-8



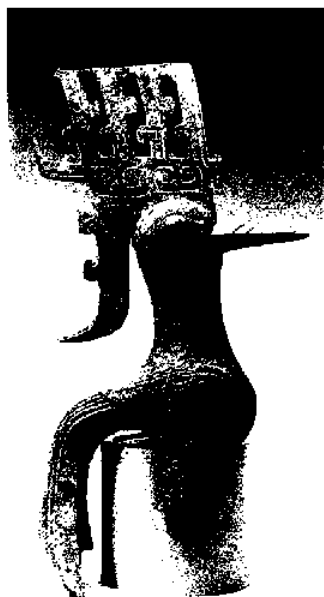
32 E型銅鳥 K2③:239-1



33 G型銅鈴 K2③:70-7



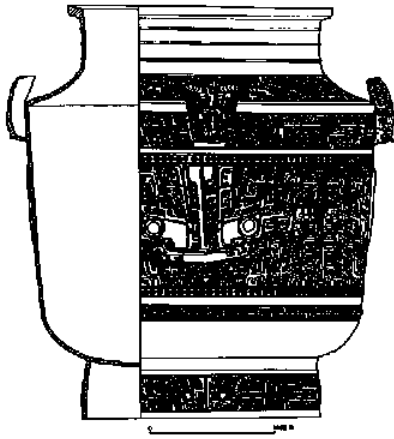
34 小神樹上人面鳥 K2③:272



35 A型鳥 K2③:193-1



36 円尊肩部上の鳥 K2③:23



37 I式円鏡 K2②:70



38 鳳桂鏡 (岐山県賀家村出土)



39 鳥耳円鏡 XDM:27



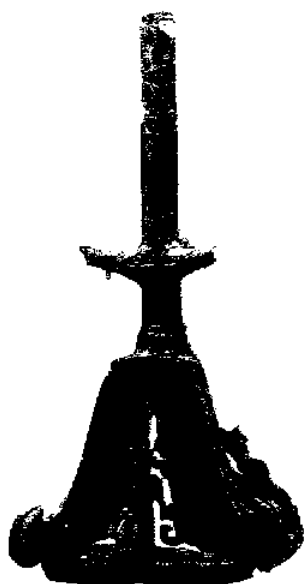
40 桃果上立鳥 K2②:213



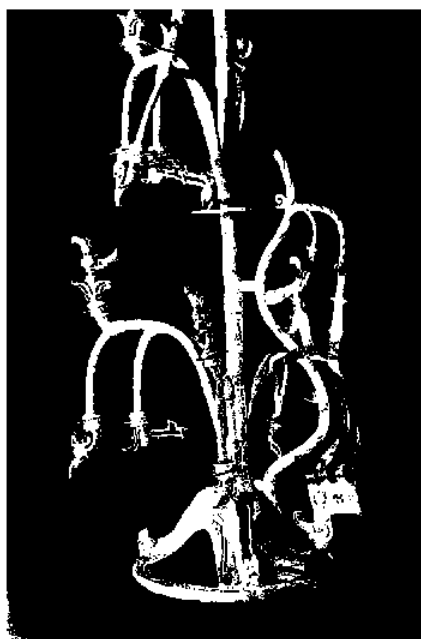
41 A型鳥型飾 K2③:193-4



42 一号大型神樹の鳥 K2②:94



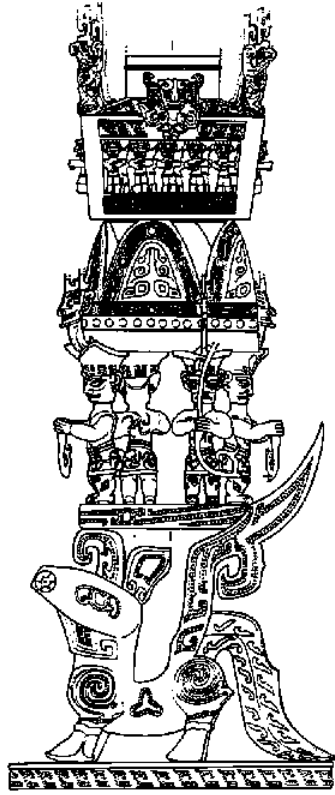
43 二号大型神樹の守護 K2②:194



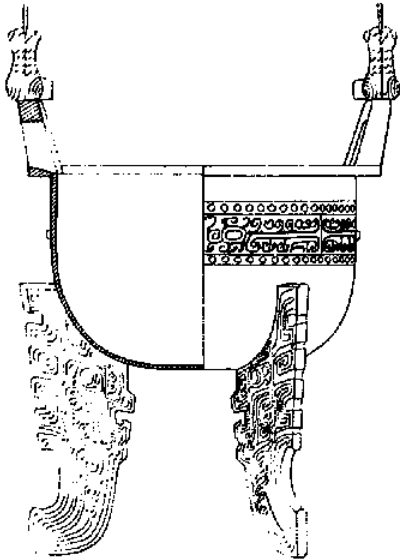
44 一号型神樹の竜 K2②:94



45 B型竜型飾 K2③:145



47 銅神壇 K2③:296



46 鳥耳円鏡の美竜形足 XDM:26

(いとう・みちはる 国際文化研究所教授)